

小児科診療 UP-to-DATE

2023年1月3日放送

傷害速報(Injury Alert)とアドヴォカシー活動

国立国際医療研究センター 国際医療協力局
人材開発部 井上 信明

傷害速報 (Injury Alert) について

今回のタイトルに含まれている傷害速報 (Injury Alert) ですが、これは2008年3月、傷害速報の仕組みを立ち上げられた山中龍宏先生が、日本小児科学会雑誌に「ミルトンによる食道狭窄」の事例を紹介されたことに端を発しています。

この活動を始められた山中龍宏先生は、小児科医が遭遇する子どもの事故の多くは単発であり、報告されることすらないこと、報告されたとしても、「診断」「治療」に焦点が当てられており、予防の視点が乏しいことを懸念されました。

またこどもの事故は、その多くが繰り返し起こっており、死に至るような大きな事故が起こらない限り、なかなか社会の変化につながりにくいことにも問題を感じておられました。

防ぎうるこどもの事故を防ぐことができるようにするためには、なにが起こったのか、その発生状況を詳細に調べ、記録に残すことが重要です。その実践の場のひとつとして考えだされたのが、この傷害速報 (Injury Alert) です。わたしは約10年前からこの活動に加わらせていただいております。

傷害速報 (Injury Alert) は、おもに小児医療関係者が診療されたこどもの事故事例を投稿する場です。事例は、所定のフォーマットにしたがって記入いただき、日本小児科学会の事務局あてに投稿していただいています。

傷害速報について

Injury Alert (傷害速報) は、山中龍宏先生が2008年3月に「ミルトンによる喉頭狭窄」の事例を日本小児科学会雑誌に掲載したことから始まる

事 例	年齢・性別 9か月 性：男
傷害の種類	喉頭
原因対象物	哺乳びん・乳首の消毒剤 (タブレット型) 錠剤品だったらしく、包装も簡単なものであったとのほか
臨床診断名	喉頭狭窄、食入入口部狭窄
発生場所	保育園は、自宅の内部の遊しの下に哺乳瓶とともに入って
関係の人・状況	娘 (当時2歳)、母が笑った時には、姉が哺乳瓶で遊んで
発生時期	12月3日
発生状況	発症不詳
発症時の詳しい様子と経過	娘が喉頭狭窄の疑いを持って診断を出し、それを本児の1階に上ったたかおの父を交際し、1階の浴室で遊んでいたと報告し、喉頭狭窄も疑わせたため翌年1月3日に入院し1月20日に、手術、呼吸が少し回復するが、喉頭狭窄のため、2月8日に手術を報告され、緊急入院した。
治療経過と予後	2月8日、緊急手術を施行 (気管切開術、気管パルン拡張術) 手術後、呼吸が少し回復し、2月28日には、喉頭狭窄が軽くなったと報告された。食後パルン拡張術からの食入再開し、喉頭狭窄が軽くなった。気管パルン拡張術が軽くなっているものの、手術、食入入口部は拡張不全であった。2月29日には喉頭狭窄手術を行った。2月4日に退院し、以降、外傷にてフォロー中である。残存している。

事例の記載に当たっては、事実をできる限り詳細に記載していただくようお願いをしています。いただいた事例は、日本小児科学会のこどもの生活環境改善委員会内の傷害速報担当で対応させていただきます。

投稿いただいた事例のなかには、情報が不十分なことがありますので、そのような場合は、投稿いただいた方に再度コンタクトして情報を集めます。場合によっては、事故が発生した場所の写真を撮影することや製品や発生環境の計測を行うこともあります。さらには事故状況を再現する検証を行うこともあります。このように、できる限り事故の発生状況が再現できるようなレベルを意識して情報を集めています。

その後、傷害速報でコメントをつけるようにしています。発生した事故について、国内外の状況はどのようになっているのかについて、文献をもとに考察をします。さらにどのようにすれば似たような事故を防ぐことができるのか、その対策についての提案もコメントのなかで行っています。

予防活動の3つのE

このコメントをつける際に意識していることは、「注意しましょう」では事故を防ぐことはできない、ということです。

こどもの事故が発生すると、ときにわたしたちは親の不注意が原因であると考えるてしまうことがあります。たしかになかには不注意な保護者のかたもおられるかもしれません。しかし多くの保護者は、普段からこどもが事故にあわないように注意を払っておられるのです。

したがって、大切なことは注意をしなくても事故を防ぐことができる、そのような環境やシステムを考えることだと考えています。

そのために必要な考え方に、たとえばハドンマトリックスという傷害予防に関するフレームや3つのEと呼ばれる予防活動の重要要素があります。ハドンマトリックスは、事故の発生した前、

傷害速報について

- 小児医療関係者が経験した事故（傷害）事例を学会に投稿
- 事実のみを、できる限り正確に記載
- 「傷害速報」担当がコメントを記載




「注意しましょう」では予防できない

Haddon Matrix

	ヒューマン	機械・器具	環境
発生前	思い込み 知識不足	ブレーキの状態	道のデザイン
発生時	チャイルドシートを装着	安全装置の起動	
発生後	ファーストエイドのスキル		

- 事故（傷害）予防の方策を検討する際の3つのE
 - Enforcement
 - Engineering/Environment
 - Education

発生時、発生後の3つの時間的軸と、人、もの、環境などの要因をかけあわせ、それぞれ原因となることをあげて状況を整理するものです。3つのEとは、Enforcement、Engineering/Environment、そしてEducationの頭文字で、法令による規制、技術や環境、そして教育に取り組むことが、効果的な対策を検討するために含むべき要素であると考えられているものです。わたしたちは、常々このようなことを意識してコメントをつけています。

またコメントを作成する過程で、該当する製品を扱う企業や業界団体の方と協議することもあります。企業から製品開発の概要をお聞きしたり、業界を挙げての事故予防対策等をお聞きし、そのような情報をコメントに反映させるようにもしています。

事例紹介

さて、傷害速報(Injury Alert)の活動が開始されてから10年以上が経過し、小児医療関係者の傷害速報に対する認知は高まってきていると考えています。事実、投稿する医療者の数も増えており、合わせて傷害速報の報告を契機に、子どもにとって安全な環境づくりにつながる活動も生まれてきています。

今回はその1つをご紹介します。

傷害速報で扱った事例に、1歳6か月のお子さんが、自宅の居間にあった窓のブラインドを上下させる紐に自分の首をひっかけてしまい、いわゆる首吊りの状態で発見されました。発見時には意識レベルは全く反応のないJCSIII-300でしたが、迅速な対応と連携により、受傷後3週間後には自宅に帰ることができるレベルに回復しておられます。

この事例についても、先にご紹介したように、わたしたちは丁寧に情報をひろいあげて記載し、さらに国内外の状況を紹介し、ブラインド紐の高さが、後発年齢のこどもの身長から考えて、決して手が届かない高さにすることやコードに一定の力がかかるとコードのループが外れるようにするなどの製品の改善点などを提案したコメントを記載して報告いたしました。

この事例の報告があったのち、複数の類似例が傷害速報に投稿されています。最初の報告があった約1年後、ブラインドの紐の安全対策に関する動きが国内でありました。

最初に東京都商品等安全対策協議会のなかで、ブラインド紐の危険性について審議がはじまり、その報告書のなかで過去日本で発生したブラインド紐による致死的事例の報告が紹介されています。そこに傷害速報に掲載された事例をご紹介します。

この協議会の報告をうけ、経済産業庁ではブラインド等の紐の安全基準を設ける、JIS規格化に向けた検討を開始しています。また日本ブラインド工業会の統一基準として、チャイルドセー

ブラインドコード安全基準に関する企業等の動き

- 2013年10月より、東京都商品等安全対策協議会においてブラインド等のひもの安全対策が検討され、2014年2月に報告書が公表された。
- 過去、日本で報告された同様の事例7例を紹介、このうちの3例は傷害速報「No.36 カーテンの留め紐による縊頸」とその類似例

ブラインド等のひもの安全対策

—東京都商品等安全対策協議会報告書—

平成26年2月

東京都生涯文化局

フティー実施基準が設けられています。その後、JIS 化に向けた協議が開始されてから約3年がかりでしたが、「家庭内用ブラインドに付属するコードの要求事項」として、こどもにとっての安全性に主眼をおいた基準が明記されました。

これらの一連の動きは、決してわたしたちが主体になって動かしたものではありませんが、丹念に現場の情報を拾い上げ、事実を記載しておくことが、こどもたちにとって安全な環境を作るための一助となった可能性があると感じています。

10年以上続けられている傷害速報の活動ではありますが、依然防ぎうる事故（傷害）によって命を落とす、あるいは重篤な後遺症に苦しむ子どもたちは存在しています。

10年以上続けられている傷害速報の活動ではありますが、依然防ぎうる事故（傷害）によって命を落とす、あるいは重篤な後遺症に苦しむ子どもたちは存在しています。

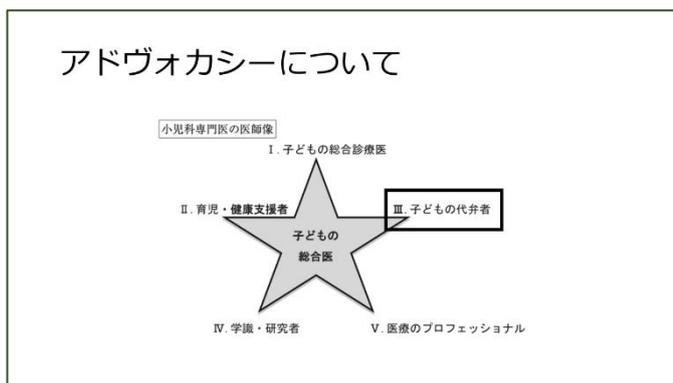
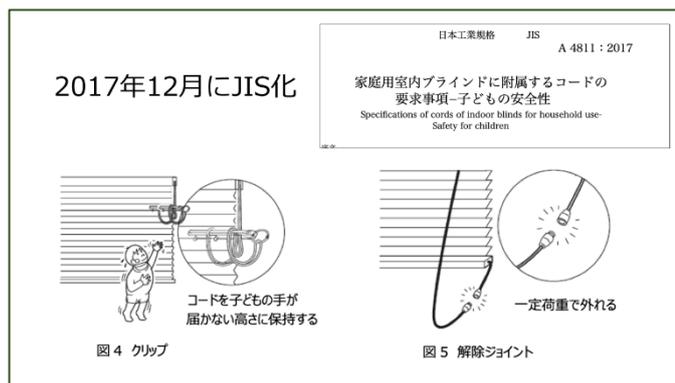
アドヴォカシーについて

この課題を解決するために、わたしたちに求められていることは、社会に対して声をあげることができない子どもたちの代弁者として、社会システムを変えていく活動、アドヴォカシー活動を続けていくことではないかと考えています。

アドヴォカシーとは、社会に対し、何かを呼びかけることを意味する言葉ですが、わたしたち小児科医の専門医が果たすべき役割のひとつ、こどもの代弁者として挙げられています。

もちろんほかにもやるべきことは多くあることは事実です。ただ日々の診療でこどもたちやそのご家族と接し、子どもたちの抱えている課題の近くにおられる臨床の先生方は、その声を拾い上げ、社会に届けることができる機会が多くあると考えています。

かつて多くの小児科医たちが予防接種の公費負担を求めて活動しました。これも立派なアドヴォカシー活動です。同じように、事故で苦しむこどもや家族を減らすため、わたしたちも少しずつあゆみを進めることができればと考えています。



「小児科診療 UP-to-DATE」

<https://www.radionikkei.jp/uptodate/>